防災や災害医療における質の向上と意識改革で命を繋ぐ

現代社会学部
中田 敬司 教授

経験を礎にして防災や災害医療の課題を解決

私は、消防航空救助隊、IRT国際消防救助隊として活動した経験を活かしながら、消防防災や災害医療などの研究を行っています。消防防災分野では、現在総務省の消防防災科学技術研究推進制度の「通信指令専科教育導入プロジェクト」に参画し、消防通信指令員の教育・訓練標準テキスト作成や教育内容の研究に着手しています。

また、災害医療分野においては、災害急性期に早急に活動する医療チーム「DMAT」の活動に発足当時から携わっています。被災地などで効率的な医療活動を展開するには、通信環境整備とともに情報管理や移動・輸送、燃料・物資の調達、マネジメントや記録などが必要となり、災害対策本部の運営も重要な要素と言えます。現在はさまざまな業界団体との連携とともに、この「災害医療におけるロジスティクス」に関わる人材の育成を実施しています。

他に、海外で発生した大規模な災害に対し、被災者の救助や医療支援活動などを行う「JICA国際緊急援助隊医療チーム(JDR医療チーム)」において、派遣メンバーとして登録を受けるとともに、JDR医療チーム総合調整部会アドバイザーとして事業に参画しています。

地域の方々の防災意識も学生とともに高めたい

2015年、本学では「シーガルレスキュー」という任意団体を立ち上げました。これは、消防や警察、自衛隊や海上保安庁などを就職先としてめざす学生の事前学習とともに、有事の際に冷静に行動できる人材育成を目的としています。また、メンバーが心肺蘇生法やケガの手当て、ロープ結索などをマスターするだけでなく、その技法を学内や地域へ普及させ地域貢献に発展させることを視野に入れて活動の幅を広げています。

2015年8月に大阪の商業施設で行われた「防災の日特別企画」では、シーガルレスキューのメンバーがスタッフに、私が講師になり「ちびっこBOUSAIトライアスロン」というワークショップを行いました。約20年前の阪神・淡路大震災で暗闇の中、住民の助け合いによって命が救われたことを例に挙げ、暗闇の中でどのような動きができるかを考え、今後起こり得る巨大地震などの広域災害に備えるためにも、自分たちで助け合えるスキルを高めるメニューを実施しました。このように、地域の子どもから大人までの防災意識を高めながら、学生たちにもさまざまな経験や知識を培って欲しいと願っています。

モチベーションの高い組織や個人が命を救う

私は、「災害対応には変えることのできないものと、変えることができるものがある」ということも伝えていきたいと考えています。いつどこで災害が発生するかわからない中で、救助に関わる人数や機材、時間など物理的救援資源は限られています。しかし、謙虚に学びを継続し個人の能力を向上させたり、良好な人間関係を構築し、やる気のある生産性の高い組織をつくることは可能で、チームの生産性が向上すれば、多くの命が救われる可能性も拡がります。それはDMATや国際緊急援助隊医療チームにも当てはまるでしょうし、地域や家族、個人の考え方においても同じことが言えるでしょう。例えば、有事の際にパニックに陥らないよう、普段から訓練を行うことで、具体的に何を準備し、何をしなければならないのかが明確になり、災害を他人事でなく、自らのこととして考える意識へと変わってくるのです。

災害を乗り越えるには、「自助」が7割、近隣で助け合う「共助」が2割、国や公的機関による「公助」は1割とも言われています。このようなこともお伝えしながら、防災や災害医療についての活動を、今後も精力的に続けていきたいと思います。

ロープ結索を教えている
シーガルレスキューのメンバー

■法学部 ■経済学部 ■経営学部
■人文学部 ■現代社会学部
■グローバル・コミュニケーション学部
■総合リハビリテーション学部
■栄養学部 ■薬学部 ■大学院

●ポートアイランドキャンパス ●有瀬キャンパス

夢へのチャレンジが、未来を創る
神戸学院大学
神戸市中央区港島1-1-3 078-974-1551(代表)